

失敗に動機づけられる日本人？

○山崎梨花子¹・橋本博文²

(¹ 安田女子大学心理学部心理学科・² 安田女子大学心理学部ビジネス心理学科)

目的

動機づけの文化差に関する実験を行った Heine ら（2001）の研究によれば、カナダ人は成功を体験した場合に再度挑戦しようとするのに対して、日本人は失敗を体験した場合に再度挑戦しようとするのが明らかにされている。本研究では、Heine らの知見を踏まえつつ、「頑張ろう」という気持ちを生み出す要因として、成功・失敗体験だけでなく、周囲の人たちとそれらの体験が同じか違うかという要因にも着目した検討を行う。

方法

実験対象者 女子大学生 168 名。

調査項目 「頑張ろう」という気持ちが成功・失敗体験によって変化するかどうかを検討するため、本研究では社会的感受性を測定するための検査だと称する架空の検査を用意した。この検査を受け、その結果が知らされる前後で「頑張ろう」という気持ちが変化するかが分析の主眼となる。

実験は 2 回に分けて行われ、1 回目の実験では、架空の検査終了後すぐに「頑張ろう」という気持ちを測るための心理尺度に回答してもらった。1 回目の実験からちょうど一週間後に、今度は検査結果として、ランダムに 5 条件に割り振った成績（100 点満点）を通知した。5 条件とは「自分成功・周り失敗条件」、「自分成功・周り成功条件」、「自分平均・周り平均条件」、「自分失敗・周り失敗条件」、そして「自分失敗・周り成功条件」である。検査結果を知らされた直後に 1 回目の実験と同じ心理尺度に回答してもらった。心理尺度によって測定された「頑張ろう」という気持ち（以下、頑張る得点）の変化を調べるために、検査結果の通知後の頑張る得点から、通知前の頑張る得点を引き、算出された値を頑張る得点の変化量とした。（頑張る得点がプラスの値を示す場合、次に向けてもっと頑張ろうと思う気持ちになったことを示し、反対にマイナスの値を示す場合、次に向けてもっと頑張ろうと思う気持ちにはならなかったことを示す。）

結果

検査結果通知前の尺度のアルファ係数は 0.87

であり、通知後の頑張る得点のアルファ係数は 0.89 であった。頑張る得点の変化量を従属変数、条件（自分と周りの成功・失敗体験に関する 5 条件）を独立変数とする分散分析を行ったところ有意な結果は示されなかった ($F(4,159)=1.67, n.s.$)。次に、頑張る得点の変化量を従属変数、「自分平均・周り平均条件」を除き、体験（成功・失敗）と周囲の人たちと同じか違うか（周囲と同じ・周囲と違う）を独立変数とする二要因の分散分析を行ったところ、体験の主効果 ($F(1,128)=5.26, p<.05$) のみが有意となり、その他は有意とはならなかった。最後に、探索的な分析にはなるが、東アジア人と欧米人の差が顕著に示されるとされる自尊心の程度に着目し、自尊心尺度の理論的中央値 (4) によって高群と低群に分けたうえで、先ほどと同様の一要因の分散分析を行った。その結果、Figure 1 に示されるとおり、自尊心高群では有意差は示されなかったが ($F(4,58)=0.53, n.s.$)、自尊心低群では有意差が示された ($F(4,102)=3.14, p<.05$)。

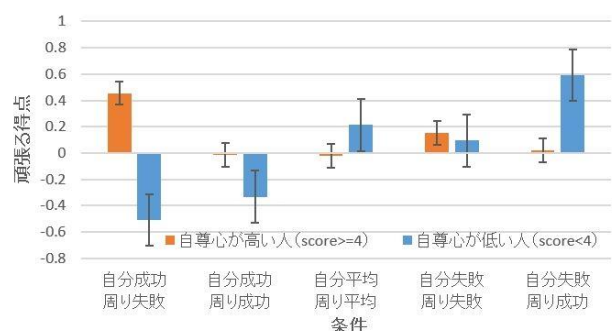


Figure 1. 各条件における頑張る得点の変化 (自尊心の高低)

考察

本研究の結果は、Heine らの知見を概ね再現する一方で、周囲の人たちとそれらの体験が同じか違うかという要因には効果が見られないという結果を示すものであった。興味深い知見としては、自尊心の高低による頑張る得点の変化の結果である。自尊心低群は日本人に特徴的とされる動機づけのパターンが示されるのに対して、日本人であっても自尊心が高い人たちの間では、欧米人の特徴とされるような動機づけのパターンが示された。これらの知見の頑健性を検討することが、今後の課題である。